要約

2009～13 年度「異分野融合による方法的革新を目指した人文･社会科学研究推進事業」に係る研究プロジェクト「意思決定科学・法哲学・脳科学の連携による『正義』の行動的・神経的基盤の解明」（代表・北大文学研究科・亀田達也教授）においては、根本的な方法論的問題、すなわち規範理論と実証研究という異なった範疇にある思考の接合の可能性が浮かび上がった。両者は、認識論的・論理的・発見論的に異質の理論特性を有し、これらのギャップからはしばしば相互の無関心や対立が帰結する。しかし、このような相克を超えて、両者の異同を踏まえつつそれらを生産的に接合するにはいかなる視点が重要なのであろうか。本稿は、実証研究は規範的想定の適切性の検証によって規範の現実的な有意義性を高める、規範的主張の現実的な実行可能性の検証によって規範の実現度を高める、規範の内容的な有意義性それ自体についてその経験的実現の境域の可能性を提示するといった点で規範理論に重要なつながりを有することを示唆し、上記プロジェクトにおいては、直接的にはジョン･ロールズの正義原理の現実的な有意義性が、間接的にはその原理の実現度が確認されていると論ずる。